

原爆に遭う

新見 静男（当時10歳）
札幌市

私は広島市楠木町2丁目で10歳の時に原爆に遭いました。

8月6日は快晴で風もなく、穏やかな朝の始まりでした。母が突然宮島に行くと言ったので、私は身支度をして外に出ました。出た所は広場で、そばを国鉄山陽線が通っており、鉄道が爆撃を受けた場合を想定して強制疎開をさせたところです。

ところが空襲警報が解除されたのに爆音がするので空の方を見上げました。その瞬間全身がものすごい熱さに包まれ、アチチ、アチチ、アツイヨー、助ケテー、助ケテーと何度も地団太を踏みました。どれくらい時間がたったのか、やがて身体の熱さも収まり、目をそっと開けて見たところ真っ暗で何も見えないのです。暫くしてやっと周り一面家がなぎ倒されて野原のようになり、遠くのあちこちで炎が上っているのが見えました。

ふと自分の手足を見ると、右の手の甲に肘からの皮がぶら下がり、半ズボンなので膝から足首のところまで両足の皮膚がぶら下がっていました。それらは手で引っ張ってもとれないのです。また自分で見ることはできませんでしたが顔も火傷を負いました。

会社が休みだった兄は、木陰から飛行機をみていたので怪我はありませんでした。我が家は全壊状態です。母と姉は家の下敷きになりやっと母を見つけることはできましたが、いくら探しても姉は見つかりません。そのうち遠くにあった炎はいつの間にか近くにまで来ていました。結局母と私たち兄弟3人はそこから避難することにしました。私は兄に背負われて、太田川沿いの道路を伯母の住む長束へ向けて避難しました。姉の遺体は何日か後にほとんど白骨化した無惨な状態で見つかりました。

身体を焼かれた人が水を求めて次々と太田川に入っていきます。私も川の水につけてもらいました。まわりは衣服がボロボロの人、皮膚が焼

けただれた人、真っ黒に汚れた人、大人も子供もありません。その太田川ではたくさんの人が息絶えて川に浮かんだそうです。そのうち黒い雨が降ってきましたが、私は次第に気を失い、気がついたら学校の教室に寝かされていました。農家の女性がトマトを1個持ってきてくれて夢中で食べた記憶がありますが、その後また気が遠くなり、荷車に載せられたことまでは覚えています、気づいた時は伯母の家にはいました。記憶が戻ったのは9月末か10月、すでに柿の実が赤くなっている頃です。

顔や腕や両足の火傷は、気づいた時には大分よくなっていました。それでも皮膚が落ち着くまでには4、5年はかかったのでしょうか。薬などない時代です。初めは麦粉に酢を入れて練ったものをつけたと聞きましたが、はがす時が大変だったようです。人骨を油で練って使ったとも聞きましたが真偽の程はわかりません。その年の10月30日、運送の仕事に全身火傷を負って寝たきりになっていた父が死亡しました。私も少し歩けるようにまでなっていましたが、葬儀に出ることは出来ませんでした。

高校を卒業して就職するのにも大変苦勞しました。いくつ試験を受けてもことごとくダメなのです。最後の会社に「その顔はどうかさったのですか」と聞かれて事情を話したところ、ようやくそこが私を採用してくれました。それ以前の会社は、聞かれなかったばかりに、顔の火傷の跡が災いしたのかもしれないと思うことがあります。

このような状況を作り出した戦争は二度と起こしてはなりません。そして核兵器は絶対に必要ありません。